

選考委員長総括

日本生命財団児童少年分野の選考委員長を務めております松見淳子でございます。どうぞよろしくお願ひ致します。私が選考委員長を務め始めましたのはつい最近のこととございまして、先立つこと5年以上、前委員長の服部祥子先生にご指導頂きまして、私たちがお仕事を引き受けさせて頂いているということをし添えながら、服部先生にも感謝申し上げたいと思ひます。

本日、お忙しい中、ご参加頂きました皆様方に心より御礼申し上げます。研究代表者の先生方には、成果をご報告頂き、この1年間私どもともコミュニケーションも密にして頂きまして、今日素晴らしい発表をして頂きありがとうございました。また、会場あるいはオンラインで参加して下さった皆様には的確な質問もお寄せくださりまして感謝しております。

今日の林理事長のお話にもございましたが、児童少年の健全育成助成（実践的研究助成）と称しまして、研究チームは現場の実践家を含めて構成し、研究成果の社会還元、社会実装を目指すという点で特色がございます。

助成の主要テーマは、「子どもを巡る真のウェルビーイングの探求」ですが、このテーマは非常に壮大なものでございまして、歴史・文化・社会の影響を受け、時代を反映し、多様化していると思ひます。

学術的には子どもと子どもを取り巻くあらゆる分野に関係がございますので、今日の発表者は多職種連携の中で研究を続けておられます。今日は2021年度、1年助成に採択された6チームの研究成果を公開ワークショップの形で発表して頂きました。子どもを巡るウェルビーイングに対する理解を深め広めること、そして何よりも科学的エビデンスに基づくウェルビーイング視点の必要性を私たちは再認識できたのではないかと存じます。

本日の発表を振り返り、社会実装の観点からまとめさせて頂きたいと思ひます。研究チームの代表者の先生方には貴重な資料をご提供頂きましてありがとうございました。まず、今日の研究テーマを総覧してみたいと思ひます。【下表参照】

児童・少年の健全育成助成 2022年度実践的研究助成ワークショップ 《2021年度1年助成研究成果の報告》

- ・『発達障害児の不安軽減に向けた家族参加型CBTの受容性と有効性』
野上 慶子 氏（神戸大学大学院博士課程、日本学術振興会 特別研究員DC2）
- ・『発達障害ペアレントトレーニングの支援 -親の怒り制御への注目-』
高堰 仁美 氏（東京大学大学院 博士課程）
- ・『言語の問題を早期に発見する評価法の開発：文の多様性の視点から』
遠藤 俊介 氏（埼玉県立小児医療センター 主任）
- ・『聴覚過敏を持つ子どもたちのための音環境づくり実践』
野口 紗生 氏（一般社団法人 こどものための音環境デザイン 理事）
- ・『予防のための子どもの家具遊具化視点に基づく教材開発と効果検証』
大野 美喜子 氏（国立研究開発法人 産業技術総合研究所 研究員）
- ・『福島原発事故後の子どもの発達の実態解明と養育者支援の効果検証』
内山 登紀夫 氏（福島学院大学 教授）

ご注目頂きたいことは、それぞれの研究の背景には子どものウェルビーイングを巡る研究に必要な社会実装の要素が反映されているということです。この順番で今日発表頂きましたのは偶然ではなくて、私たち委員会と事務局の方で色々と考えまして、社会実装に必要であろうと思われる3つの要素を順番にご提示致しました。すなわち、第一層として、子どもをとりまく家庭、養育環境、第二層として教育、そして第三層として意思決定を促すような政策・施策について、これら3つの要素について、順番にご発表頂きました。



そこで第一層として、野上先生と高堰先生には発達障害のあるお子さんの保護者に対するオンライン支援法の開発と効果検証を通して、保護者と子どもとの相互交流が実際に変化するかどうかについて御発表いただきました。家庭での子どもへの働きかけの改善、ユーザーフレンドリーなアプリの開発によるセルフモニタリングなどの技法を身につけ習慣化していくことを目指しておられます。社会実装の第一層として、子どもの保護者と家族への家庭におけるサポートに着眼した実証研究を展開しておられます。支援の技法としましては、主に認知行動療法あるいは応用行動分析というデータに基づく実証研究法、支援法が基盤になっています。開発されたプログラムの普及に向けて先生方はホームページに参加者を募り、保護者の恒久的なサポート源になっておられると思います。保護者支援の社会普及への期待が非常に高まっている時でございますので、今後も研究を続けて頂きたいと思っております。

第二層として、教育、療育、施設などに関連のある実装研究を発表頂きました。遠藤先生は、言語発達の現場の観察に基づき、言語聴覚士の視点より、言語発達の問題を早期、2歳から3歳までに発見するために評価法の開発研究をしておられます。文の多様性を分析し評価するため、もともとは英語で開発されたものを日本語にアダプトしていくという直接観察法の提唱は、発達障害のリスクを同定するうえで教育的な貢献が今後期待されております。教材、支援法の改善、開発に結びついていく応用研究でございます。保育現場で園児の言語行動を直接に観察し記録分析する手続きを踏み、自然環境における実践研究に基づき、科学的な評価法を開発することを目指しておられます。言語の障害の早期発見に大きく結びついていくことが期待されています。

さらに養育・教育環境でご注目頂きたい研究は、野口先生のチームによる聴覚過敏を持つ子どもたちの音環境づくりの実践です。児童発達支援センターを舞台に、音に過敏な子どもと音環境の実態調査に基づいて、吸音性を統制した音環境づくりのプログラム研究は、まさに個人個人にあわせた教育環境の創設ともいえると思います。一般社団法人こどもの音環境デザインのウェブページには既に今日のご発表が案内されておりましたように、活発な普及活動にも貢献されています。聴覚過敏の子どもが耳を塞ぐ行動を私たちが現場で見ることは非常に辛いことです。人間工学的な視点も取り入れ、吸音性向上による教育環境をデザインすることで、子どもの真のウェルビーイングを追求するご研究を続けて頂きたいと思っております。

第三層として、内山先生のご発表に続いていくわけですが、政策・施策に関することでもございます。その前に、大野先生のチームによるご研究は、事故予防のために、子どもの家具遊具化視点に基づく教材開発と効果検証に関わるものでございます。大野先生は、昨今増える一方の子どもの転落事故ですとか、いろいろな事故が子どもの日常生活で起こるということに注目をされ、事故を予防するための環境調整の必要性をデータベースで説いておられます。私たちは環境調整という用語を心理学でも使っていますが、真の意味で環境調整に有効な科学的な方法をお示し頂いたと思います。成果は東京都子どもの安全のためのプラットフォームからダウンロードできることが可能となる予定であるということをお示し頂きましたし、東京都都立医療センターでも配布の予定だそうです。積極的に情報を公開していく、その情報の内容がデータベースであってエビデンスベースであるところに、非常に強い魅力があると思いますので、一般性も増えていくと思います。子どもの好奇心などによる事故を防止するためには注意を促すだけでは駄目ですよ、ということがいろいろな所で明らかになってきています。実際に事故を予防できる環境を作っていくという立場からのご研究であると思います。社会還元に直結しています。

児童発達支援センターの音環境づくりも家庭内の子どもの事故防止環境の整備もともに人間工学に関係するアプローチであり、研究助成の範疇が多職種連携を含み、多角化してきたことを、私たちは今回気づかされました。

第三層として、最後にご発表頂きました内山先生のご研究は、2011年3月に起きた福島原発後の子どもの発達の縦断研究と養育者支援に関する非常に貴重な研究です。子どもの特性、育つ環境、保護者支援、被災地域において保健医療、福祉資源が大幅に不足する現状を、実態調査に基づいてデータをお示し頂きました。そればかりではなくて、縦断研究の結果に基づき、さらに継続的に支援を行うためには、現在、支援者のスキル向上が必要であること、保護者支援のニーズが充足されていないこと、よって支援プログラムの普及がまだまだ遅れているということをお示し頂きました。

原発後何年も経っていてもまだこの状態であり、データも出ているのに状況が変わらない、ボランティアに頼っているという状況はいかなるものかといった提言も行われています。子どものバースコホート毎の発達のデータベースをもとにご報告を頂きました。これはまさに政策による継続的な支援の保障が必要になる課題であると思われます。私たちはこのような研究の成果が保障に結びついていくことが社会実装の最終目的ではないかと考えております。政策から具体的な施策へと社会実装研究が動いた例は、海外にはかなりございます。日本でも、内山先生がおっしゃったように、データを集めて説得力を増していきましょう、というメッセージを今日頂くことができました。そうすることによって、子どものウェルビーイングに貢献する研究を続けていくことが出来るということでございます。

以上、今日のご発表の総覧をさせて頂きました。2021年度1年助成による研究報告は、いずれも社会還元へのニーズを非常に強く、明らかに示すものと思います。日本生命財団 児童少年の健全育成助成では、今後、さらに研究成果の普及と定着化、あるいは一般化、そして持続化に貢献するような社会実装研究とはいかなる要素を備えたものであるかという課題を真剣に検討していきたいと考えております。

社会実装の定義は非常にたくさんございますけれども、今日は具体的に先生方の専門分野において、どういうものであるかということをお示し頂きましたように思います。本日のワークショップにあたりまして、絶え間なくご協力ご支援を頂きました事務局の皆さま、選考委員の皆さま、それから参加者、発表者の皆さまに最後にもう一度感謝をして、総括の言葉とさせて頂きたいと存じます。どうもありがとうございました。